杏林医会誌　42 巻 1 号　2011 年 3 月

巻頭言

杏林大学医学部長　　後　藤　　元

医療を取り巻く環境は最近 10 年の間に大きく変わった。この変化は大学医学部についていえば，例えば卒後研修システムの改定であり，研修医が研鑽を積む場についても，その内容についても様変わりしたといってよい。しかし医療環境の変化はそれのみに留まるものではなく，社会全般の動向，国民ひとりひとりの意識のあり方を色濃く反映するものでもある。

その結果として，医療現場に科せられた期待，要求は年を追う毎に大きく，重いものとなっている。日々の診療の負担がいや増す中で，どのように「研究」を位置づけるのか，どのようにそれを展開してゆくのか，あらたなパラダイムシフトが求められている。本学においてもこうした状況は，大きな課題として科せられており，医学部でも，医学部附属病院でも，看護部でも，保健学部でも，その対応は喫緊の問題として提示されている。

その中で，杏林医学会雑誌の果たすべき役割についても今一度考えてみる必要があろう。創刊以来 40 年に亘る歴史を刻んでいる本誌の伝統を，新たな社会規範，新たな医療環境の中で，今後更に発展させる道をどのように拓いてゆくか。

その意味で，紙媒体による冊子の形から電子ジャーナルとしての形へ大きくシフトし，掲載までの time delay についても改善が図られるなど，外形としての体裁は整いつつあるように思われる。今後は電子ジャーナル化された本誌に，どのような論文がどのような形で掲載されてゆくのか，ゆくべきなのか，全学的な議論が待たれるところである。